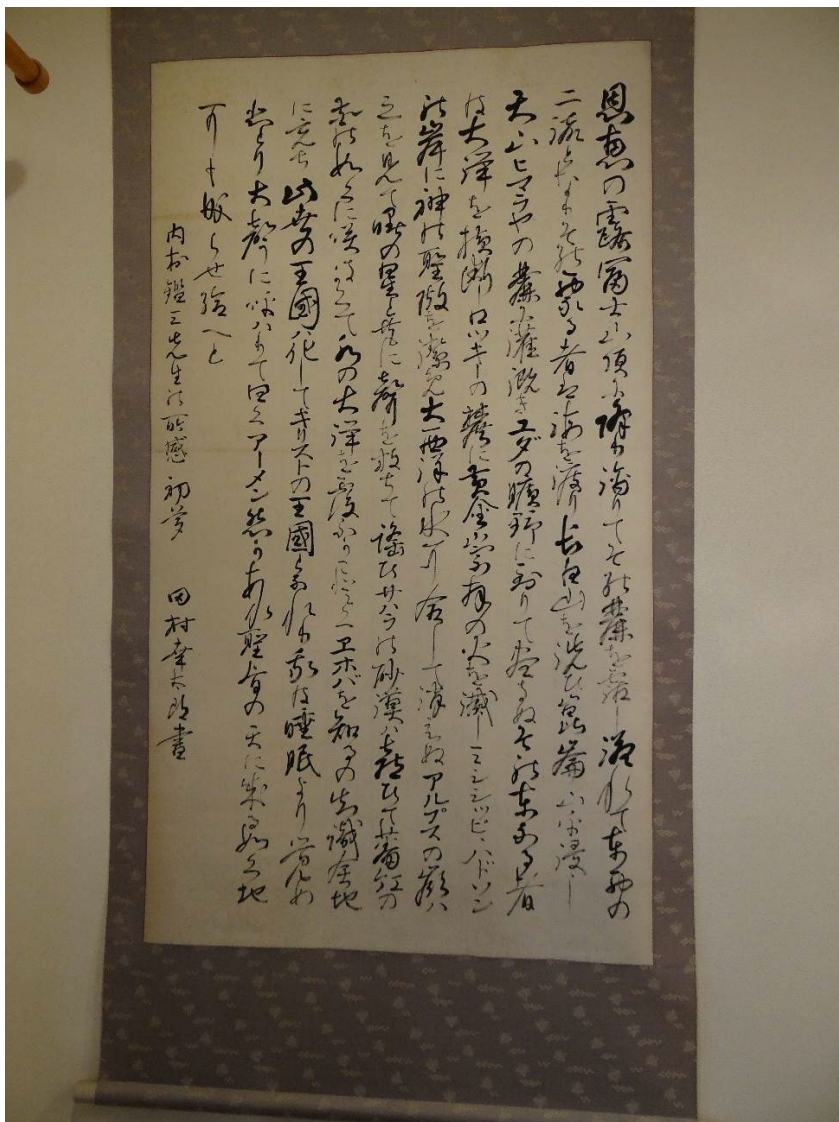


「天なる我が家」——田村幸太郎の生涯

田村 明
田村 千尋

(注) 当該論考は田村明が書いた原文に田村千尋(実弟)が大幅に加筆編集し、父親の田村幸太郎の生涯を詳細に描いたものです。別途、田村明の原文もお読みください。

1945年8月15日、日本は敗北を宣言し、世界第二次大戦の戦闘行為は終わった。翌年の正月、父、幸太郎は内村鑑三の「一日一生」にある1月3日の「初夢」を書いた。父は生涯、「書」を好み、折に触れて、随所に作品を残してくれていたが、この「初夢」は、最高の傑作だと確信している。戦争が終え、空襲のない初めての正月を迎えた、それは父にとっても心の整理を終えた時でもあったのであろう、二階の広間に赤い敷物を敷き、貯え置いた「美濃和紙」を開いて筆を執った。幸太郎は内村鑑三に出会い、その講演会で語られた言葉を聞き、圧倒的な純粹さ、真実に触れ、これこそ、神からのメッセージとして受け入れる事が出来たのだと思う。言葉の中にある真の意味をより深く学ぶ、内村鑑三にはそういう力があつた。それ以降、幸太郎は毎週、内村集會に参加し、内的な力を膨らませ、その心に触れたのであつた。



めぐみのつゆ、富士山頂にくんだり、したたりてそのふもとをうるおし
あふれて東西の二流となりぬ。その西なるものは海をわたり、ペクトユをあらひ、
クンルンをひたし、テンシャン、ヒマラヤのふもとに水注ぎ、
ユダの荒野に至りてつきぬ。

その東なるものは大洋を横断し、ロッキーのふもとに黄金崇拜の火を滅し、
ミシシッピー、ハドソンの岸に神の聖殿をきよめ、大西洋の水に合してきえぬ。
アルプスのみねはこれを見てあげぼのの星と共に声を放ちて歌い、
サハラ砂漠は喜びてサフランの花のごとくに咲きぬ。

かくて水の大洋をおおうがごとく、エホバを知るの知識全地にみち、
この世の王国は化してキリストの王国となれり。我は眠りよりさめ、ひとり大声によ
ばわりていわく、「アーメン、しかあれ、みこころの天になるごとく地にもなら
せたまえ」と。

1. 封建都市・村上

幸太郎は、明治 22 (1889) 年 1 月、雪深い村上に生まれた。日本海に沿って一番北の
端にある現在の村上市、当時の村上町である。明治 22 年は明治の帝国憲法が制定され、現
在につながる市制や町村制が始まった年だ。村上町が制度的にはっきりした。新しく市と
いう制度ができて、東京市をはじめ 38 の町が市を名乗るようになったのもこの年だった。
明治維新が近代国家としての姿かたちを整えた年である。

北西の風が吹き付ける頃になると、日本海側のこの町、村上は大粒の雪が固まりのよ
うにどっと降ってきて目の前はもう真っ白、何も見えなくなる。今日も、昨日も雪だった。
人が通る為の道を確保するため、道の真ん中にうず高く積み上げられ、家の一階からはも
う出入りができない。雪の季節は皆二階の窓から出入りするようになる。人々の交流も物
の運搬も極端に制限される。それが明治中ごろの新潟県が一番北にある町、村上の情景で
ある。現在は降雪量が減って、もうこの姿はあまり見られない。それに、たとい雪が大量
に降っても、大型の除雪車が来て、主要道路の雪は朝までには取り除いてしまう。昔には
考えられないこと、世の中は変わっていく。

村上を有名にしたのは、皇太子妃になった小和田家が村上の出身だということだろう。
雅子皇太子妃の祖父は村上の貧しい下級武士の家系だったが、「鮭の子」といわれる奨学金
を得て高等師範学校に進み、高校の校長にまでなった。その子息が雅子妃の父親で外務次
官や国連大使を務めた小和田氏である。村上の「鮭の子」の制度はかなり有名だが、これ
を機会にその知名度はまた上がった。この「鮭の子」とは、三面川で稚魚を養い、後、放
流して海洋で成長するのを待つ、川に戻ってきた鮭を捕獲して資金を蓄える、という仕掛
けで、これを奨学金制度としてのことである。鮭に育てられたのだから「鮭の子」という
わけだ。

長岡の米百俵は他藩から貰った米の使い道を、一時の食いつぶしに使わずに、将来の
子弟を育てる教育の資金に当てたというので有名な話だ。村上では研究開発の末に鮭の稚
魚を放流して稼いだ金だから、継続性はあるし、はるかに合理的で経営的だ。だが、後に
述べるように、かなり問題もある。

村上もほかの町と同じように、昭和 30 年の昭和の大合併のときに、周辺をあわせて
市制をひき村上市になった。人口は減少して現在 3 万人ほどの地方小都市だが、日本海
の荒海に面する瀬波温泉もこのときに村上市に入った。昔からの「堆朱」という芸術的な漆
器を産する。お茶もとれる。お酒を好きな人なら、有名な「越の寒梅」よりもいけると言
われる「べ張鶴」がある。祭りの時に町内を引き回す京の祇園祭様式の「おしゃぎり」と
いう山車も見事だ。いまは、まちづくりの面も積極的に行われて、全国の自治体の中でも

個性的な町だとされている。それはよいのだが、反面、日本のなかでも、際だって特殊な封建的な町だったということだ。

村上も幕末に二百数十あった城下町のひとつだ。代々徳川譜代の大名で固めている。始めは十五万石の榊原家がいたこともあるが、中期以降から幕末までは五万石ほどの内藤家が治めていた。封建的というのは城下町だからというのではない。日本の主な町はほとんど城下町だし、身分差の激しい徳川時代は当然、封建的だった。ここで言うのは明治以降のことである。

城下町は、城に領主がおり、それを中心に階級に応じた序列をもって武家屋敷が置かれる。さらに、その外側に町人町があり商工業を営んでいるのが普通だ。村上には標高135メートルの臥牛山、ぞくにお城山という自然の丘があり、今も石垣が残る城があった。徳川時代には一国一城制で、城山は使われなくなり、領主は城山下の平地の御殿に住む。その周りが高級武士の屋敷、その外側は中級、下級武士の屋敷だ。さらにその外回りに町人が住む。武家と町人とは、はっきり分かれて住んでいた。

ここまでなら、城下町の常識だし不思議なことはない。だが、村上が違うのは、明治から昭和になっても、ずっと武家屋敷の地域と、町人町の地域が、別々の二つの自治体の行政区域に分かれていたことだ。町人側は「村上町」、これに対して、武家屋敷側は「村上基町（もとまち）」だ。略称して「町」と「基町」と言う。よくある「元町」ではなく「基町」だ。一番基本になる町ということだから、はっきり上下関係を意識した名前である。

もし第二次世界大戦がなかったら、いまでも二つの町に分かれたままだったかもしれない。二つの町は、物理的に離れているわけではなく、ぴったり接続していて誰が見ても一体の町である。それなのに、行政的には昔の武家町と町人町との間に厳然たる線をひいていたというわけだ。明治始めの一時期ならともかく、明治22年に市制・町村制がひかれる頃になっても、自治行政の単位をはっきり分けていたのは、全国を見ても村上町のほかにはない。武家も町人も一緒に一つの町を形成しているのが全国共通だったが、ここだけは特殊な町だったのである。

だから、戦前から戦後の一時期までは、二つの町では二つの小学校が別々にあった。敷地は隣同士でくっついているのに別な学校とは不思議だ。基町小学校のほうは、町の小学校よりも1メートル余りも高くなっている。地形状そうなるのだろうが、いかにも武士のほうが偉いのだぞと、いわんばかりの上段の間というスタイルだった。

昭和の始めまでの戸籍では、氏名の上に華族・士族・平民という区別が書いてあった。基町では全部士族だが、村上町の方は全部平民だ。だから、基町に住むものには、子供のときから優越感をもたされていた。親は村上出身でも、本人は全くの東京生まれの東京育ちで現に東京に住んでいる女性でさえ、戦後何十年たってからでも、「私のうちは士族だから」と言う言葉が自然に口にのぼってくるほど、差別意識が徹底的に仕込まれている町だった。士族という言葉は死語になっている時代になっても、差別意識が残っていた。人口は村上町の方が多いのだが、平民の町の子は、長い間、ことごとくに引け目を感じさせられていたのである。

何でこんなに二つ町に分かれたままに固執していたのか。それは士族たちが封建時代から持っていた特権を失いたくなかったからである。士族は、山林とか、三面川の鮭の権利とかを保有しており、これを士族たちだけで独占したい。町と合併すれば、その権利が薄められ、いままで差をつけ蔑視してきた町人たちにも分け与えることになる。そんなことはしたくないということである。

「鮭の子」という奨学金制度も「基町」のもの、つまり旧士族の独占だったのである。この権利を平民には渡したくない。いまはとにかく、村上町の子は、どんなに優秀でもこの奨学金は貰えなかった。逆に士族でさえあればどんな最下級でももらえた。だから、「村上には“鮭の子”というのがありましたね」というのは誤りで、「村上基町には」と訂正してもらわなくてはならない。

この差別による権利を保持するために、二つの町に分かれていたわけである。第二次大戦中に、やむなく合併したときでも、士族の権利を自分たちだけで確保するために、別

に財団を設立して鮭の権利などを移し、相変わらず旧士族だけの独占物にして、戦後になってからも続けていた。ほかに例をみない極度に封建的な町だったといわざるをえないだろう。

2. 誕生と養子

幸太郎の父は宮大工であった。田村五太夫という。村上の社寺のほとんどを手がけていた。日本海側は、北前船の交通も盛んで、日本の北の大動脈であり、京、関西方面とも直結していたから、そのほうの影響も受けていたであろう。日本海に接する所は、江戸時代にはけっこう文化の大動脈のなかにあったのである。これは、もっと北にある、鶴岡や酒田も同じである。

幸太郎には三人の姉がいたが、男の子はいなかった。一番上の姉とはかなり年が離れている末っ子だ。当時のことである、ともかく、男の子の誕生を待ち望んでいた。祝い酒でも飲んでいただろうか、或いは気になることでもあったのか、また棟が上がった。こんなことには慣れてるし、朝飯前のはずである。ベテランといっても一番の働き盛りの年頃だった。魔がさすようにこの時、足をとられ棟から落ちてしまった。今度生まれてくると知らされた子供のことを考えていたのかもしれない。「また、女の子かな、いや今度こそは男の子を産んでもらいたいものだが」などと考えているうちについて、足を踏み外して棟から落下してしまったのだ。さらに、その打ちどころが悪く、そのまま亡くなってしまったのである。

「幸太郎」という名前を誰がつけたのかはわからない。生まれる前に一家の大黒柱である父親を失い、その顔も知らないのだから、幸せであるはずがない。それを、あえて「幸太郎」と名づけたのは「だからこそ、せめて幸せに」という願いをこめてつけられたものだろう。働き手である父親を失えば、一家はたちまち窮する。当時の家督相続制からいえば、長男が相続するのだが、まだ生まれてもいないし男か女かも分からないのだからどうしようもない。田村の戸主は母親が継ぎ、そのあと、長姉がついだのであった。

養子に貰いたいという人がいて、母親も考えあぐねた末、幸太郎が生まれる前に養子に出すことを決めた。本人は全く知らないことだが「梅津幸太郎」という名で生まれることが約束された。梅津という人物は村上の人ではない。どこからか移ってきた人かも知れないが、西洋理髪店を開いていた。いわゆる床屋さんで、当時、散髪脱刀令が公布された後、明治の中ごろでは、ハイカラの先端だったわけである。むろん村上でははじめてで、ようやくここにも西欧化の波がやってきたそれなりに洒落た職業だったのである。今ならヘアサロンというところだが、収入もそれなりに良かった。生まれる前に父親が死んだ話など、この狭い町では「あっ」という間に広がる。梅津は子供好きだが、子供がなかったので、話を聞きつけて養子にと申し込んだようである。普通、長男の家督相続者の養子は認められないのだが、すでに家督は他に相続されていた。幸太郎はすんなり梅津の養子として入籍したわけである。広くもない町のことだし、そう遠くでもないところに実母もいたのだが、母親側はあえて遠くに置き、遠慮もあつての事だったのである。幸太郎は実母の味を知らないまま育ったわけである。ただ、年の離れた長姉は何かと気を使ってくれたようだ。養父は可愛がってはくれたが、養母は楚々として近づかなかった。あまり子供好きではなかったらしい。幸太郎も養母には馴染めず、肉親の母親からは遠く情の薄い、その意味では淋しい日々だったと想像される。

3. 中学校へ進学

当時の学制は尋常小学校4年、小学校の高等科4年で、小学校卒業には8年かかる。義務教育は最初の4年だけだ。例の段差のついた下段の町の小学校に上がった幸太郎は、さまざまな差別を感じてきた。しかし、養父、梅津は幸太郎を非常にかわいがり、商売柄、日銭もかなり入り、そこそこの金もあったので、よく物を買ってくれたという。

幸太郎はある時、養父と一緒に庄内から山形のほうまで旅をしたことがある。村上から山形県の庄内に向かうには鼠ヶ関を通る。日本海の荒海に近く、いよいよ陸奥の国に入

るという淋しい関所だ。勿論、まだ鉄道はない。とぼとぼと日本海の荒海を横目でみながら歩いてゆくわけである。野宿をしたこともあった。芭蕉も奥の細道の旅でここを通っている。幸太郎には日本海や関の淋しさと、奥のふかい見知らぬ陸奥への期待と不安に掻き立てられる旅を経験したのであろう。始まったばかりの幸太郎の人生は波高く、行方も定かでない淋しいものだったと推測される。少年時代に経験したこの旅は強く印象に残り、その後も旅には憧れるようになったようだ。

幸太郎は、生まれる前に父親を亡くし、養子に出されたことで大きな不幸を背負っていたが、それは彼の人生の方向を変え、新しい時代に生きる引き金になったとも言える。当時は、みな親の職業を継ぎ、長男ならそれが当然のことだったのである。幸太郎は父親が生きていれば、宮大工の修行をしていたことであろう。また、手先も器用だったし、背も高く、体格もよかったので大工としても一人前以上になったのは確かである。だが、幸太郎が実父、五太夫の子として大工の道に進み育ったなら、新たな世界に接して行くことは無かったであろう。目に見えない何かの力で彼自身は新しい苦難の道をきり開いていくことになったのである。

その頃、小学校だけで終わらず、中学校に入るのは特別な人だけだった。幸太郎は本好き、勉強好きだった。義父、梅津は幸太郎が中学校へ行きたいと言えば、すぐに行かせてくれた。それだけの経済力もあったということである。当時、明治末から大正にかけて論壇で活躍した吉野作造は、宮城県古川（現在、大崎市）の出身だ。古川には中学校はなく、仙台の中学に進むため汽車で仙台に向かう。町の人々が総出で旗を立てて見送る写真が吉野作造記念館にある。当時、中学に入るということはそれほど大きなことだったのである。

幸太郎が中学に入ったのは、明治 30 年代前半のことだが、この頃でも小学校だけで終わらずに上の学校に行く人の割合は 3% ぐらいしかなかった。いまは、58% も大学に進学する時代とは全く違った環境である。その意味で幸太郎は誠に恵まれていたと言ってもよいわけである。それに中学が村上町にできたのは、幸太郎が上がるやっと 4 年ほど前のことで、それ以前なら、新潟にしかない。新潟には通えないから、下宿するしかほかはない。そこまでして中学に進むのは本当に超エリートで財のある人にしか許されなかったわけである。

中学は町には一つしかないから、士族-平民の差別はなく、村上以外の在の人々もやってくる。狭い町に止まらず、世の中は開けていった。年齢は今の中学に入るより 2 つほど上だから、満で 14 歳、卒業したときは満 19 歳になっていた。いまで言えば、丁度、短大の年齢である。世の中全体がずっと大人びていたから、中学生の高学年ともなれば、もう、かなり大人の自覚も出て来たであろう。この時、幸太郎は大きく成長したのであった。また、同時に大きな負い目を背負い、人生の苦難と同時に人の誠意にも触れ、大人への道が切り開かれて行くことになる。なんと言っても、その過程で話し相手のいなかった幸太郎に二人の親友に遭遇した、ということは大変、大きな事だったと思う。その名は大島三郎と中山敏雄、そして、この 3 人はいつもクラスでトップを競っていた。大島は基町の人、中山は 20 km ほど離れた在の大須戸の出身だった。

さらに、ここで早稲田大学の文学部を卒業したばかり、新進気鋭の岡村先生が赴任してきたのである。ここで良い先生に出会えたことは幸太郎の生涯にとっては大きな事だった。その頃、全国の大きな主な町でも、まだ中学校が行き渡っていない時代だったが、若手の俊英が田舎の中学にも赴任してきた訳である。丁度、愛媛県の松山中学校に夏目漱石が赴任したのもこのころで、漱石は明治 29 (1898) 年、熊本の高等学校に赴任するまでは中学の先生だった。それより数年遅れるが、岡村先生もそうした若手の先生の一人であった。後に早稲田大学文学部の教授として教鞭をとるが、今の大学院などという制度はないから、優秀な学者の卵は、地方に来て経験をするのが、大学院にあたるのかもしれない。

「本」だけに首っ引きの教育よりも、生きた生徒や社会に触れる事が学びの基本にあると考えられていたのであろう。

岡村先生はそもそも村上とも新潟県とも全く関係はない。江戸っ子の漱石も全く関係

のない松山に行ったのと同じである。生徒にも良い刺激を与えたが、本人も大いに刺激を受けたであろう。もっとも、「坊ちゃん」に出てくるように、生徒たちもけっこう罪のないワルサをしたようだが、新任の岡村先生も校舎の二階の上からはやし立てられたり、物をほうられたりされた。だが、生徒は授業を受けて、たちまち岡村先生の魅力に引き込まれてしまう。なんと言っても、東京の大学を出たばかりの若い先生は、知識も情報も豊富で魅力的だったのである。とくに田村、大島、中山の3人組は先生にすっかり傾倒してしまい、まだ独身の先生の下宿にしょっちゅう押しかけて話し込んだようだ。先生と言うより兄貴分のような感じだったのかもしれない。そこでは貪欲なまでに先生のすべてを吸収しようとしていたといえる。後に、幸太郎が東京へ出てからも、先生のお宅をしばしば訪れている。既にして、師弟というより兄貴分のような交際が続けられたのであろう。当時はテレビどころかラジオもない時代だ、岡村先生からの影響力は絶大なものがあつたのである。一方、先生にとっても、田舎の若い学生達との付き合いは結構、楽しかったと想像される。先生は亡くなるまで、この交流を続けてくださったのであつた。

楽しいばかりではない。実質的な勉強の水準も高かつた。ワーズワースやブラウニングなどの英詩はもちろん原書でよんだという。そのころ中学の英語の教科書はまだなかつた。一年生から原書を使って、英語を習うということは、ある意味でいまの学生よりもどこか充実していた、といえるだろう。幸太郎はその後、英語をよく使う仕事をするようになるが、基礎はこの村上中学の授業を受けた岡村先生である。そして、この先生の指導で後にどこでも通ずる英語の力がついていいたわけである。

岡村先生はなかなか洒落な人だつた。どこか夏目漱石にも似た所があつた。英文学が専攻だが、江戸っ子の先生は、日本の伝統文化についても詳しかつた。幸太郎のちに歌舞伎などにもかなり傾倒したのはこの時、岡村先生からのかなり強い影響を受けたことによると思われる。

4. 青年時代のキリスト教会と中学の卒業前後

中学は5年で卒業する。新たな世界が開け、楽しかつた学校生活も終わろうとしている最後の年になり、上級学校への進学問題にまず躓いた。もう一つ、深刻な問題は家庭内のごたごたで激しく心身を悩まされることになる。それは養父と養母の仲が割れて最後にはどうしようもない状況になってしまったという事だつた。実は養母も籍がはいっていなかったのである。長い間、養父とは同棲していたというわけだ。だから、幸太郎には戸籍上、母親というのが実質的にはいなかった、というわけである。その養母はもともと派手好きで、いい加減に養父との生活に飽きがきていた。最後は若い男と駆け落ちしてしまつたというわけである。そのことで養父は荒れ狂い「お前が駆け落ちを手伝つたのだろう」とあらぬ疑いまでかけて非難を浴びせてくるほどになる。生れおちるより世話になり、可愛がってくれた養父、そして中学迄も行かせてくれた事に感謝はしていたのだが、こんなこじれ方になると、血の繋がらない養父との関係は悪い方にばかり進んでしまう。その上、この状況、若い幸太郎には話を聞いてもらえる人もいなかった、はげ口のないまま、行き場を失い、次第に無口になる、ただ、ただ不運と嘆く日々が続いた。そんなある日、幸太郎は村上に新しく出来たキリスト教の教会が出来たことを知つた。何故か、日曜日でもないのに吸い込まれるように、その門をくぐつたのである。するとそこに一人の女性、加藤文さんがいた。彼女は青年がふらりと教会に入ってきたこと、その行動に何かを察したのであろう。暖かな眼差しで青年を迎えてくれたのだつた。幸太郎は自分が今、置かれている状況をきいてもらいたかつた、そして、全ての事を話すことになるのである。悩みは切々たるものがあつたが、真剣に聞いてくれた文さんは、心から彼に同情した。幸太郎は初めて自分の悩み事を聞いてくれる人に出会えた、それはどれだけ心の慰めになつたことか。教会には新しい西欧文化の香りがあつた。「叩けよ、さらば開かれん」と聖書はしるしている。

幸太郎は新しいものへの関心は強かつた。その上、教会には、あの村上の街、固有の封建性はない、士族も平民もおなじである、「神の前にはすべての人は罪びとである」とい

う発想は幸太郎にとって、それまでにない誠に新鮮なものだった。社会の有り様に平等という感覚はなかったからである。しがらみのない幸太郎は教会の中の人々の行動にも目を疑った。男女が共に集い、明るさと同時に互いに暖かな会話が飛び交う。これはそれまでの社会の動きとは全く異なるもので、戸惑いさえ感じさせる程の違いをみたのだった。家庭的な温かさに飢えていた幸太郎にとって、この社会はまるで別天地だと思えた。若くしてキリスト教に触れたことで、それまでにない自分を発見した。その後、内村鑑三に出会い、彼の話聞いてさらなるキリスト教の人の心に触れる真実を見てそれが生涯を通じて幸太郎の道案内となった。

親友の大島や中山が大学に進むという知らせを受けた。それは東京帝国大学の予備門、第一高等学校と名称を変えていたが、めでたく合格した。これは地方の俊英が進む最高の道だったのである。岡村先生の仕込みを受け、皆は既に、英語の学び方を心得ていた。その流れの中に迷いはなく容易に合格出来たのだろう。しかしながら村上は東京からは遠かった。新潟まで出て、そこから長野、軽井沢と信越線を遠回りして東京へでるのである。清水トンネルができて、前橋から新潟に直結できる上越線ができたのは昭和に入ってからのことだった。幸太郎は何より東京へ出て勉強したかったが、学資をだしてくれる人はいなかった。中山は村の名士だったから、山林、田畑などをいくら処分すれば金は出来る。大島には例の「鮭の子」の特権があった、というわけである。

幸太郎の養父との関係はすでにこじれにこじれ、殆ど破局に近かった。もう支金を出してもらえないような関係ではなかった。養父は連れ合いに逃げられてから、すっかり店に熱が入らなくなり、収入も減ってしまっていた。到底、上級学校の話など出来るはずもない。養父との仲が殆ど完全に決裂状態になってしまっていたのである。幸太郎は自分の運命に慄き、絶望を感じていたのである。

上級学校に行くための金はだしてもらえない。士族でもないから、いくら勉強ができて「鮭の子」の恩典に預かることはできない。似たような話に福沢諭吉がいた。かれは自伝のなかで「門閥制度は親の仇でござる」と書いたことで有名だが、幸太郎も、このときほど士族と平民の差を思い知らされたことはなかったのである。諭吉の場合は、それでも藩の恩恵を受けて大阪に勉強に行かせてもらえたが、幸太郎は、門閥の差どころではなかったわけである。士族か平民かの差が上級学校に上られるかどうかにかかっている、どうすることもできなかった。勉学への志は高かったが、泣く泣く二人の親友を見送ることになり、一人、村上に取り残されたのである。

二人の親友は東京の最高学府に進める、それはかなわぬ夢であると知った。語り合える友人達は近くにはもういなくなってしまった。それからの幸太郎は次第に無口になってゆく、梅津との関係も、もう完全に破局に近づいていた。元の田村の家では長姉の長男がいて、大工を継ぐため、修行中だった。だが、自分は完全に違う世界で生きて行かねばならない。幸太郎には「天涯孤独」という言葉が痛い程、胸に突き刺さってきたのだった。

ともかく現実はいまから一人で食べてゆかなくてはならないと認識する。そして中学卒業後は、村上の在にある女川村の小学校で代用教員を務めることが出来ることになった。当時、小学校の訓導になるためには養成機関である師範学校は中等学校扱いで、高等小学校を出てから5年間学ばねばならない。幸太郎のように、高等小学校から中学校に上がっていた人は、師範学校と中学とは就学期間も卒業年齢も同じなので、幸太郎が中学校を卒業してすぐに小学校の先生をしても、別におかしくはない。もし、そのまま村上にいたら、小学校訓導の資格をとってそのまま先生を続けることも出来たわけである。

若い先生は背も高くスマートだ。英語も話せる。小学校といっても、高等科では今の中学校2年生にあたる。幸太郎はけっこう女生徒たちに人気があった。後になるまで、手紙をよこしてきた女生徒がいた。それは多少の慰めにはなっただろうが満足できるものではなかったろう。親友たちがいまは東京で勉強している、そう考えるとなおさらだ。「自分も東京へ行って勉強したい」そういう思いが募るばかり、話を聞いてくれる相手もいなかった。悶々とする時間が過ぎて行った。それでも向学の思いを捨てることができなかつた幸太郎はなんとかして東京へ行こうと考えた。満20歳になり徴兵検査を受ける。そのこ

ろ、丁度、日露戦争が終わり、軍備縮小になった。幸太郎は人より背も高く、頑強だったが、近眼という理由で丙種になった。丙種は兵役に行かなくてもいいということである。

やがて、幸太郎が成年に達したとき、梅津の養父とは決定的な絶縁状態になってしまった。そしてこの時、自分の歩む道は「梅津」ではないと考える。「田村」ではないか、自分でそう決断したのである。田村には何も当てにする親戚がいるわけではないが、梅津姓に止まってはおられなかい、という心情が強く働いたのであった。自分の意思ではなく養子になっていた幸太郎としては、梅津という自分を清算して、改めて自立した「田村幸太郎」を宣言し、新たな自分を始めたい、という思いが強かったということであろう。

5. 寧波（にんぼう）・上海

そんな悶々とした日を送っていた幸太郎に、一通の手紙が中国、当時の清国から届いた。中学卒業の頃に村上教会で自分の置かれた境遇を訴え、聞いてくれた「お文姉さん」からである。彼女は、紅松雄二氏と結婚し、紅松文になっていた。紅松氏は東京高商（いまの一橋大学の前身）の出身で、そのとき中国の寧波で税関長をしていた。手紙は、「寧波に来ないか」という誘いの便りであった。お文さんは、見込みのある人物とみた幸太郎が、小学校の代用教員で悶々としている様子を知って、見るに見かねて手紙をかけたと思われされる。それは、幸太郎にとって、村上から抜け出すための最高の道筋をつけてもらったことになる。彼を救い出すためには、殆ど唯一の手であったろう。「なにはともあれ、村上から離れたい」そう思っていた幸太郎は天にも昇る心地であった。村上のこの差別社会、養父、梅津とのことなど、自分を育ててくれた町ではあったが、ここに何時までも留まり、悶々と過ごすことはもう過酷の度合いが過ぎていた。ここにはいたくなかったのである。

当時の中国、つまり清国は、税関は汚職、密輸入の温床だった。その為、清国人以外の外国人を高級で採用することが列強から強制されたのだった。清国は自国の税関でありながら、外国人を長に頂かなければならない、という不平等条約が強いられていた。日本は日露戦争の直後であり、列強の一員として税関長を受け持つことになったわけである。

外国人税関長は給与も高いし、生活はすべて西欧式、何人もの清国人を雇用して優雅な暮らしをしていた。それでも、汚職や不正をされるよりは、このほうが安くついたのであろう。何しろ清国の末期の税関の汚職は桁外れにひどかったという。

幸太郎は寧波の生活を始めた。特権を持った外国人としての生活は想像以上に豊かで楽しかった。紅松雄二氏はクリスチャンでイギリス式の紳士である。税関長ともなれば、社交が中心の仕事でそんなに忙しいものではなく、パンヤンの天路歷程に打ち込み、その研究に余念がなかった。万巻の書物に囲まれ、まるで学者のような生活をしていたのである。そこに若い幸太郎が居候として舞い込んできた。歳はそう違わないが、片や税関長、一方は居候なのだから、召使か書生のように扱われても仕方ないわけである。しかし、紅松氏は洒脱で、威張ることの嫌いな人、若い幸太郎を昔からの友人のように扱ってくれたのであった。幸太郎も若いながら紅松氏と対等に話ができたのが何よりだった。パンヤンを語り、ダンテを語り、本当の人生の豊かさ、そして教養を学んだのである。お文姉さんは、シャキシャキと家を切り回し、底抜けに明るい人柄だった。自分もできればこんな明るい女性と清潔で暖かなクリスチャンホームを持ちたいものだ、という夢を抱かせてくれた。ともかく自分が育った梅津の家とはあまりにもかけ離れた生活、どのように自分の身を置いたらよいか、迷う様な日々を過ごす事になる。

紅松家にはたくさんの子供たちが次々に生まれ、幸太郎はその遊び相手をするくらいが仕事だった。すっかりイギリス風の紅松家である。テーブルで食事し、ナイフやフォークを使うのも慣れ、マナーも身についてくる。中学で覚えたテニスが出来、まだ日本ではそれほど流行ってはいなかったホッケーも出来た。幸太郎は上達も早かったようだ。いままで村上に居た頃とは全く違う生活が展開していったのである。後に、幸太郎はイギリス紳士のようなだといわれたが、それは将にここで身につけた、たしなみであり、全てキッチンと整えるという基礎をここで養われたからであろう。

時は過ぎる、ここ安寧での生活は楽しいがいつまでもただの居候でぶらぶらしている

わけにはいかない。そろそろ自分の時間に区切りをつけて、この地に居た経験を生かさなければならぬ、そう思った幸太郎は貿易商社の仕事を得て、上海で働くことになった。上海はその頃から経済活動の最も活発な都市になっていた。また、イギリス租界、フランス租界、共同租界など西欧人に支配されていたのである。また、裏では怪しげな国際的な組織が暗躍する都市でもあった。日本からは中国大陸への門戸であり、定期の船便もあった。その定期便に宝田一蔵が機関長として乗っていた。彼は、幸太郎と同じ村上中学出身の2年先輩、キリスト教会でも一緒に旧知の仲だった。彼は基町出身で、鮭の子の奨学金を貰い商船学校（現在の商船大学）を卒業した。また親から受けた銃砲店の権利を弟に譲り、好きな船乗りになっていたのである。

その一蔵、細面の美しい愛子と結婚して上海にやってきた。新妻にとっては、初めての外地、見なれぬ上海にとまどいもあったが、それなりに楽しんでいたのである。ある日の夕方、フランス租界を歩いていると、そこに、あわただしく人を追ってくる清国の警官が逃げてゆく男を追いかけて発砲した。それがなんと誤って愛子の腕にあたってしまったのである。傷は浅かったが、服は血染めになる。駆け付けた一蔵は一瞬のことで、なすすべを知らなかった。偶然、そこを歩いていた幸太郎は近く自分の下宿に連れてゆき、応急手当をしてから医者連れていったという。幸い、骨に異常はなく、重傷ではなかった。魔都といわれた上海でのことだ。新婚の愛子は気も動転したことだろう。幸太郎も思わぬところで先輩に遭遇し、援軍を送ることが出来たのである。日本に帰ったらぜひまた訪れてくれるようにと一蔵は幸太郎に話した。そして、この時の偶然の出来事、出会いが後の幸太郎の運命を大きく左右することになったのである。

6. 日本への帰国、そして東京帝国大学法学部図書室勤務

寧波、上海生活も長くなった。20歳台の半ばを過ぎてきた。その頃、人は人生50年と言い、もう立派な大人だ。先のことを考えると、紅松氏に頼ってばかりもおられないと考えた幸太郎は急に日本に帰りたい気持ちが湧いてきた。ただ、村上だけはもう戻りたくなかった。そして東京へ行くことを決断したのである。上海からの船は荒れた。買って来た（甕カメ）が船室をごろごろと走りまわり、前途多難を思わせる中、期待に胸膨らむものもあった。東京へ行くのはこれが初めてであった。

東京では、恩師の岡村先生にも久し振りに会えて歓待される。親友の中山は胸を患って一高を卒業しただけで、国に帰っていた。その後、気候のよいところのことだったのである。静岡県の沼津で中学校の先生になっていた。大島は東京帝国大学工学部建築学科を出て技師として逓信省に勤めている。官庁建築としては、逓信省は花形だった。しばしば会っては語りあったが、やはり親友と話しをするのは楽しい。岡村先生や大島と会っていると、また大学に行つて勉強したいという意欲に駆り立てられたのだ。

年齢も30に近づいてきたし、何より「お金」がない。たまたま東大法学部の図書室で人を募集しているということを知りて応募するとすぐに採用された。法学部図書室に勤務する。壁中に書棚が巡らされ、本に埋まったなかに、小さな机がひとつある。当時のこと電灯は暗い。そのなかで本の整理や、本の購入事務などをする。憧れていた帝国大学の真只中で、今自分は本に囲まれている。最初はぞくぞくするほど興奮した。

法学部には当時も著名な先生がいて、声もかけてくれた。後に東大総長を務めた小野塚喜平次が教授でいた。吉野作造もいた。こうした政治学の先生方には大いに関心があった。先生たちも、学問に熱心な幸太郎青年に関心をもった。また、清国に行つていたという話にも興味があったであろう。著名な二人の先生には、大学をやめてからも現況などの手紙をかいていた。筆達だった幸太郎の手紙を見て、先生たちは丁寧に返事の葉書をおくっていた。大学に入って学生になつても、なかなかできないような親しい交わりをすることができた事は幸太郎の財産になつていったらう。

だが、幸太郎は悩んだ。この生活は楽しいが、あまりにも給料が安い。法学部の資料室勤務は、正規の職員ではなくごく低い雇いの身分だ。これでは到底妻子を養うことはできない。ここにはいくら居ても、学者になれるわけでもないし、資格をとることも出来な

い。中学のときに果たせなかった思いは形を変えていくらか慰められたことで満足しなければならぬだろう。幸太郎は短い期間だったが、ここの仕事に別れを告げた。三四郎池のほとりを廻ると法学部の研究室が見える。だが、残念ながら、ここは自分の一生を託せる場ではないと知った。

7. 浦和の吉田家

宝田一蔵も船乗りでは、西欧航路などになると、長期間家を空けねばならぬ。これでは妻も可哀そうだと考え、後藤新平の下で働いた長尾半平の世話で東京市の水道局に技師として入ることになった。機関長だったから機械には強い。陸に上がりいまは東京にいる。

宝田の家を訪れてみよう。東京市水道局の公舎に住んでいた。愛子の両親は浦和でキリスト教会の牧師をしていると聞いた。両親は上海でのお礼をしたい、なにぶんにも年老いているので浦和まできてくれないかという。吉田亀太郎牧師は、岩手県の生まれで、石巻で過ごし、若い頃は新潟に来て石油採掘に携わっていた。たまたま新しくできたキリスト教会を覗いて見た。新潟にキリスト教の伝道にきていたパーム師や押川方義の話聞き強く感動する。亀太郎とまち子はそのとりなしで結婚し、亀太郎はキリスト教伝道師の道に入る。東北の田舎の教会をずっと廻っていたが、晩年になって埼玉県に移り、越谷教会から最後は浦和教会の牧師になっていた。

亀太郎の夫人まち子は、新潟市の中心、古町の出身だ。幸太郎は新潟に縁がある二人に会うとそれだけで懐かしさも込み上げた。浦和教会の会員になったわけではなかったが、吉田亀太郎夫妻に初めて対面し、真に穏やかな、けれどどこか実にしっかりした話をしてくれることに真の牧師の姿を感じたのだった。寧波での宝田愛子に縁を発し、それとなく話をしにくるだけだったが、亀太郎には一男五女、愛子はその四女。まだ、結婚していない末娘に忠子がいたのである。活発な忠子は絵を描いたり、歌を歌ったり、オルガンを弾いたり、音楽が好きだった。そんな姿を見ていた教会の一人のアメリカ人が忠子を上野の音楽学校（現、芸大）で勉強することを提案、忠子も基礎から勉強を始め、見事に入学したのだった。所が、そのスポンサーがアメリカの事業に失敗し、結局、学資が来なくなってしまふ。忠子はやむなく学校を中退しなければならなくなったのである。自分の夢が消滅したことでかなりのショック、荒れていた。一方、幸太郎が比較的 足 しげくこの吉田家を訪れていたのは間違いない、この忠子に魅力を感じていたからであろう。我儘で甘えん坊、でも、活発で面白い娘だとみていた。自分にはない明るさを持つことに強く惹かれていた、とも見える、だがはるかな高嶺の花という認識が大きかったようだ。

忠子が、音楽学校をやめた後、かつて亀太郎が牧師をしていたことのある山形で教会付属の幼稚園の先生をしたり、婦人伝道師として仕事をしていた。上の山は忠子が小学校を卒業した所でもあった。その村の村長の息子が忠子を好きになり、激しく近づいたのである。だが、キリスト教と聞いただけで村長は猛反対、殆ど破局へ進んでいた。しかし、その息子が病に倒れて、最終的には村長も折れて、婚約をするまでになった。しかし、婚約するとその青年は急速に病状が悪化し、結局、帰らぬ人となってしまふ。忠子にしてみれば折角、学びかけた音楽は諦めさせられ、やっと進んだ青年との婚約も果たせぬまま、その青年は亡くなってしまったわけで、忠子の心は行き場を失い、悲嘆にくれるばかりで、まさに手のつけようもない状態になってしまっていたという。

母、まち子 は忠子にこう言っていたそうだ。「田村さんは良い人だけど、ああ職を変わるのではねえ」。幸太郎は、東京帝国大学の法学部の資料室をやめ、上海で貿易商社の仕事をしていた関係で、東京でも小さな貿易商社に勤める。だが、第一次大戦の景気で、あわよくばということ始めた小さな会社はよく潰れたのだった。上級学校の学歴もなく、伝手もない幸太郎は、新聞広告などで仕事を探す他、方法はなかった。こうして幸太郎はやむなく、良い職を求めては転職を繰り返していた。吉田の人々は「また代わった」と幸太郎の評判はあまりよくなかったのである。

8. 日本ナショナル金銭登録機株式会社

会社を転々とした幸太郎だが、挙句に就職したのは日本ナショナル金銭登録機株式会社（現在のNCR）だった。アメリカのデイトンに本社をおく。日本の支配人はアメリカ人のバーマン氏だった。英語を上海で学んだ幸太郎はその経験が役に立ったのである。上海はイギリス人やアメリカ人たちがそのまま、生の英語で話あっている世界であり、和製英語の日本人たちとは異なる。幸太郎は最初から話がよく通じたのはいうまでもない。

金銭登録機とはキャッシュレジスターの訳で、店の出入り口において金銭の出納を取り扱う機械である。1900年の初頭のこと、当時、どこのお店でも殆どはソロバンと大福帳で商売をしていた。そこに高価な管理システムの機械を置いて商売をする、その意味は、或いは効果は何か、それをどの様に受け取るかが、問題になるだろう。当時としてはかなり高価な機械である、ただ押し付けや誤魔化して売るわけにはいかない。金銭を預かる、言ってみれば店の会計システムを近代化するということである。セールスマンには、経営の合理化をはかるコンサルタントのような説明が要求され、経営をしっかりとするという事には、ある意味でしっかりした哲学が要求されたわけである。このようにお店の身になって考えてあげるといふ仕事は、ある意味で幸太郎の今までの経験が役に立ち、そのまま、環境の違いに対応するという作業で実績をあげて行ったのである。セールスマンは初対面の人にもよい印象を与えるようになり、身だしなみが大事だ、と説き実践した。それは紅松氏の所で、取得したイギリス流の所作がそのまま、幸太郎の身についていたのであった。いつの間にかビジネスマンとして、人とのそれまでの応対が、そのまま印象を与える結果に繋がっていた訳である。

戦争中の中断という事態は予想外ではあったが、結局、この会社に最後の定年になるまで勤めることになった。NCRは幸太郎のもっている才能を最高に開花させてくれる組織体だった。そのもとには紅松氏のお陰で所謂、外国人に臆することなく話が出来ようになっていたことも重要な要素であったろう。さらに若い時に様々の人の意見や、異なる人の異なった価値観に、接し、人を見る目と同時に見分を拓げる事が出来るようになっていた。これはどれだけ価値のある事であった事か、アメリカ人支配人、バーマン氏に初めて接し方た時の距離感は、そのまま、上海での経験が全て役にたったといえるのは間違いない。支配人にとってみれば幸太郎が、しっかりしたところはしっかりと、気楽に話の出来る教養ある日本人と映ったのだらう。営業もそれなりの成績を上げ、後半、セールスマン教育に携わるようになってからはさらに磨きがかかった。もともと勉強好きだった幸太郎は、そこで水を得た魚の様に活動することが出来たのだった。

9. 内村鑑三への傾倒

幸太郎の生涯で大きな出来事は若い時に遭遇した家庭での波乱、村上キリスト教会で知った、加藤（後、紅松）文さんの手引きと心からの慰め、さらにそれだけでなく、中国は寧波に迄呼んで、知らない異国の文化を若い時にいち早く、経験させてくれたこと、この全般的なサポートを受けた上、自分の力で切り開いたナショナル金銭登録株式会社という会社に就職したことであった。そして最後に決定的なことは内村鑑三との出会いある。この集会に出席するようになったことで彼の心は内面から磨かれ始め、見事に輝き出したのであった。

その頃、内村鑑三が、新宿の柏木で、いままでの教会とは違う聖書講義をしているという話が若者の間に広がりだしていた。一高や東大の俊英たちが、その下に多く集っているという。一方、その内村は日露戦争で非戦論を唱えて論壇に登場したり、第一高等学校で勅語に敬礼しなかったということで退職させられたり、キリスト者だが、どこの教会にも属していない独立伝道者であるということが信仰の真髓を語りあかす力になり、多くの若者達を惹きつけていたのであった。

時々、一般の人々が自由に聞きにいける講演会を開いていた。幸太郎は一度、話しを聞いてみたいと思った。だが、自分一人では少し気後れがした。東大生がよく話を聞きに行ったということもあるので、親友の大島を誘った。期日に待ち合わせの場所に行ったがいくら待っても大島は現れなかった。やむなく、一人で聞きに行ったのだが、そこで幸太

郎は内村鑑三の話にすっかり感動したのである。今まで牧師さんの話は若いときから何度も聞いたが、これだけ、筋の通った聖書の話は聞いたことがなかった。これは本当に生きる力になるもの、悟ったのである。心を打たれた幸太郎は迷わずその後の、毎日曜、この聖書集會に参加を申し込み、内村が召されるまで通い続けた。さらに、その後も塚本寅二、畔上賢造など内村の無教会主義を継ぐ伝道者が、独立して内村の後、独立した。また、戦後のすぐに矢内原忠雄は目黒、中根町の「今井館」で集會をはじめ、東京にいる田村家は家族全員この集會に通った。

10. 吉田家の変遷

幸太郎は浦和の吉田家には、それでもときどき遊びに行っていた。そして、母、まちは幸太郎が内村の集會に通いだしてからその姿にある変化を目ざとくみつめていた。もともと身だしなみはよい人だが、どこか、キザに感じさせる所があった。だが、それが急速に消え、むしろ落ち着きのある人柄に映るようになっていた。幸太郎の心の内面に何かたしか大きな変化が起きたと思われるのである。「この人は、忠子と結婚したら、きっと、しっかり包んでくれる」まちはそう思った。

一方、忠子は、幸太郎が中学卒、だというのが気に入らなかった。すぐ上の姉、愛子の夫は商船学校出身だし、その上の操の夫は早稲田大学を出て、帝国ホテルに勤めている。ずっと上の姉の道子はアメリカにいるが、夫は東京高等師範（いまの筑波大の前身）で学んでいた。皆、高等教育を受けていたのである。自分も上野の音楽学校（今の東京芸術大学）に入った。中学出でも当時としては立派な学歴なのだが、忠子には気に入らなかったのである。しかし、結婚してから分かったことだが、幸太郎が如何に読書家であり、本をよく読むインテリであるかということを知り、自分の考え方が甘かったかを悟った、という。親もいない親戚のない天涯孤独の身の上だということも気に入らなかった。あまり気の進まない結婚話だったが、何時も非常に思慮深い母、まち子の意見だし、それほど母が進めるなら結婚してもよい、とおもうようになった。

結婚式は、姉の操の家の座敷で父親の吉田亀太郎の司式で行われた。ささやかな結婚式だったが、孤独な幸太郎にとっては、これまでの生涯のなかで最良の日、幸太郎31歳、忠子23歳であった。当時としては二人とも遅い結婚だったのである。忠子の希望で、まだ、その頃は稀だった新婚旅行に行くことになる。そして鎌倉の海濱ホテルに行った。鎌倉は開通したばかりの横須賀線で東京からはリゾート地でもあった。ホテルで食事をすますと、突然、忠子を一人置いて、幸太郎はどこかへ行ってしまったそうである。浜へ出てみると、若者たちが火をたいて何かしている。只、それを見ている幸太郎を見つけたという。長い淋しい一人だけの生活を思い返し、いよいよ、新しい家庭を持てるということに、ここで、どう対応したらよいのか一人いろいろ考えたのであろうか、或いは、これまでの歩みを振り返っていたのかもしれない。新居は田端だった。今では考えられないが、その頃、田端文士村というのもあり、ちょっとした郊外住宅地だったのである。ここは、忠子の実家の浦和にも近く、便利だということで決めたようである。



結婚にあたって、幸太郎は忠子にある願い事をしたという、それは毎週、日曜日には一緒に内村鑑三の集會に行っていきたい、ということだった。

11. 幸太郎、忠子の家庭生活

家は、その後、大森に移る。忠幸、義也が誕生して新家庭は和やかに、時が過ぎた。

しかし、1923年、未曾有の関東大震災に遭遇する。まだ、テレビどころか、ラジオ放送もなかった時代であった。騒乱のデマにも怯えることなく忠子は気丈にふるまい。生後5か月の義也を抱いて避難所に行ったという。また、幸太郎も会社から約10kmの道を歩いて帰宅、震災そのものでは被害を受けることなく済んだという。その後、蒲田の蓮沼に居を移し、後、青山に移る。この頃の転居は、忠子の姉妹たち、とくに仲のよかった兵頭操姉についてゆくというパターンだった。結婚して6回目に住んだ家が、青山高樹町、日赤中央病院の正門前からまっすぐに行ったところだった。そしてここは今までで、一番広い家になった。5分もかからないところに操の家があり、歩いて10分もかからないところに、浦和から引退してきた忠子の両親が住んでいた。

子供は、忠幸、義也、明、千尋と4人男の子ばかりが生まれた。忠子は女の子が欲しかった。この時代、中流の家庭では今でいうお手伝いさんを置く風習が流行り、子沢山の農家の口減らしをかねて、都会に若い嫁入り前の娘をお手伝いさんに出すという風習があったのである。彼女らは食べさせてもらえれば、ごく安い給料で雇えた。こうしたことから、幸太郎の家にも米さんやりんさんが来たりしていた。大抵は二、三年いて、誰かの所にお嫁にゆく。三木露風の「十五で姉やは嫁にゆき」と赤とんぼの歌にあるが、この時代には家庭電気製品などは無く、掃除、洗濯から、米も薪や炭で炊いたわけで火加減を見るだけでも大変だったのである。ある意味で、お手伝いさんなしにはやってゆけなかったともいえる。新婚からまだ3、4年しかたっていない頃、大事件が起きる。ながらく絶交状態で、音信も途絶えていた幸太郎の養父が、突然、女を連れて東京の幸太郎の家に現れたのである。「これから、ここに世話になって居させてもらいたい」というのだ。養父はハンセン病になって、その症状も表れていたのである。忠子は、二人の幼子を抱えて驚愕、仰天した。今でこそ、ハンセン病は治療可能だが、その頃は不治の病とされ、非人道的だともいわれて非難されながらも隔離政策が採られていたのである。子供にうつたらそれこそ大変だ。幸太郎は、絶交した養父ではあるが、大いに世話になったことも忘れてはいないし、忘れられない、今日あるのはやはり養父のおかげである。ほうっておくことはできず、幸太郎は、養父を施設に入れる為に、仕事を放り出して奔走した。そして、ようやく、岡山の愛生園に入ることになる。後に、養父はキリスト教の信仰を得たという、そして生涯を終えたのだった。そして、そこへ今度は田村しん（血縁的には父の姪にあたる）がやって来た。しんは幸太郎の長姉の末娘だった。長姉は田村家を継いだ人で息子が家業ともいべき大工になっていたのである。だが、幸太郎は村上を出て中国に行ってから、一度も村上には帰ってはいなかったし、だいたい梅津家にもらわれた幸太郎は田村とは関係がなくなってしまっていたのである。帰るところもなかったのだ。そういう意味で幸太郎は新しい田村家の大元になったのだった。勿論、DNA的には繋がっているわけである。しんはその後、幸太郎、忠子の家族として、生涯を共にし、最後、お墓も一緒に入墓することになる。そのころ、アメリカ発の大恐慌が始まり、しんは働いていた紡績工場を追われてしまう。面倒をみてほしいということで幸太郎の所で過ごすことになった。彼女は生来少し耳が不自由というハンディキャップを背負っていたこともあって結局、生涯、独身だった。初めて東京に来たときはまだ十五才だった。お手伝いさんのようにして過ごすことになる。その後、戦争を通して一生を幸太郎の家で過ごしたのだった。丁度、千尋が誕生し、母、忠子は幼稚園の先生を目指し、玉成保母養成所（在、西荻窪）に通い出した。赤ん坊の千尋は半分はしんちゃんに育てられたようなものだった。千尋によれば静寂の幼年時代と評するが、しんは常に控えめで自分から発信することがあまり無かったのである。それでも、この時代、父は子供たちをつれて家でよく散歩をした。飼い犬の名はボビイとリリーだった。青山の頃も、西荻窪にいてからは、とりわけ散歩するのに事欠かなかった。幸太郎は青年時代覚えたテニスをしによく出かけた、そんな記憶がある。

家庭内では、忠子が西洋式にあこがれていた。ちゃぶ台ではなく、狭い部屋に無理に楕円形のテーブルを持ち込み、椅子式の食卓を囲んだ。幸太郎は、もともと天文学に興味を持っていたが、若い時、ハレー彗星が可成り天空にかかり、さらに大きく内村鑑三の影響からか、天文学に興味を持っていた。分厚い上下2巻の天文学の本で、ときどき解説を

してくれた。その頃まだ珍しかった天体望遠鏡を購入した。よく晴れた夏の夕方などは、庭で天体観察をした。月はもちろん、火星、木星、土星を望遠鏡でみた。東京の空もまだはるかに澄んでいたということだ。また、エンサイクロペディア・ブリタニカを買った。当時の月給の何倍もしたようだ。日本流の様なボーナスはない、ただ、営業成績が上げれば、歩合制のようなもので金がでた。たまたま入ったせっかくの大金を望遠鏡やブリタニカにつき込んでしまい、忠子はもっと家庭の必要なものに使うべきだと憤慨し、後にも先にも無い大げんかをしたのだった。幸太郎は、いざというときには思い切りがよかった。子供の頃は養父には結構ほしいものを買ってもらえたようだ。当時の床屋は時代の流れに沿い、日銭があり、ちょっとした、しゃれた生活を送っていたということだろう。

まともな、家庭生活を知らなかった幸太郎と、質素だが温かいクリスチャンホームで育った忠子、当初はずいぶん食い違いがあった、と母は振り返る。やさしく、紳士だと思っていた幸太郎が、案外頑固で、怒りっぽいところもあり、一度機嫌が悪くなるとかなりの期間、口をきかない状態が続いたともいう。そんなことで忠子は困ったことも多かったが、母親が青山の近所に住むようになってから、何かと母親のところに行って話をする様になり、忠子も心の余裕が出来た。さらに自分が働きに出るようになってからは、ようやくお互いを認め合う、気持ちがわき、しっくりするようになった。

12. 昭和の不況と転居、忠子の就職

平和な幸太郎の家庭にも、昭和の不況の波が押し寄せた。ブラックマンデーというニューヨーク株式の大暴落の起きたのが昭和4（1929）年である。アメリカ系のナショナル金銭登録器も大打撃を受け、日本資本を入れて、藤山財閥が加わり、名称を日本ナショナル金銭登録器株式会社と変更し、藤山愛一郎が社長になった。

社員の給料も大幅にカットされた。これでは4人の子供達を抱えてやってゆけない。まずは家賃の低いところに引っ越すことに、この頃は、貸家札を表の扉に斜めにはりつけた貸家がたくさんあったものだ。大きなものから小さなものまで、種類も多かった。こうして渋谷区の上智に引っ越した。今までの大きなす式の食卓は使えず、幸太郎は食卓の足を鋸で切り、椅子は処分してしまった。忠子も働きに出ることを考えたがなかなかいい所がない。そこに、また子供生まれた。忠子の欲しがっていた初めての女の子、しかも双子だった。一人は出産後、殆ど直ぐに死んだ。もう一人も小さな未成熟児だった。「初穂」と名づけたが、2週間ほどで亡くなる。ここで、忠子は本格的に働く事を決心したのであった。幼稚園の先生になろう、それには保母の養成所で資格をとらなくてはならない。西荻窪にある玉成保母養成所に生徒として通うことにした。忠子は、4人の子持ちで、若い女学校を出たばかりの生徒達と一緒に勉強することになる。

保母養成所では、絵を描くことも、オルガンをひくことも、忠子の得意の分野だった。しかし、音楽に合わせて踊るリトミックというのに、若い子と一緒にブルーマをはいて踊らなければならない。忠子は必死だった。そこではフレーベルの恩物というものを使った教育を取り入れていた。児童の発達に合わせて、考えながら遊ぶ道具である。講義だけでなく、それを使ったバリエーションが宿題として出る。夜になってから、幸太郎も手伝って翌日の宿題をやっていた。ほかの若い子たちとは、格段に違うから、玉成保母養成所のアルウン所長は忠子を重くみるようになった。卒業してからも、専攻科に残って園長を補佐するようになる。苦しい家のやりくりも一段落がつき、一家は忠子のことを考えて、玉成に近い西荻窪に引っ越した。善福寺池から流れ出る善福寺川は水量も豊か、夕方から夜になるとコトコトという貨物列車の音が響く、のどかな武蔵野の郊外の街という雰囲気、一家で散歩する時間と場所が与えられた豊かな環境の地域だった。

幸太郎は日本のNCRでの活動に身が入り、社長バーマン氏からの覚えも良く、いよ

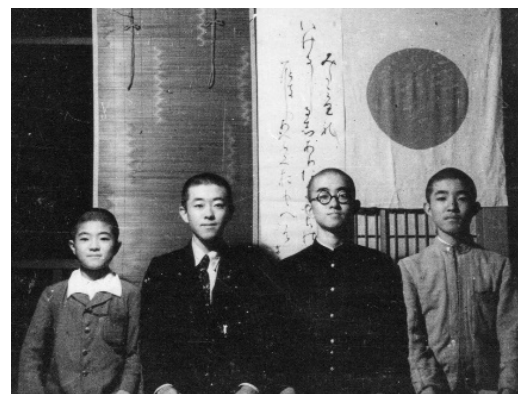


忠幸 明 義也 千尋
ボビー リリー

いよ販売部長としての活動に入るが、その前に指導者としての立ち場を学ぶ必要があった。NCR は世界規模でセールスマン教育を一定の基準に高める為、各国から指導者をデイトンに集め、パットソンによる指導を行っていた。1936年、幸太郎はいよいよ日本での指導者の立場になるということで各国からのトップセールスマン達がデイトンに集合した。当時は未だ飛行機は無く往復、船旅だったが、ある意味で開かれた未来に夢を託すような希望の旅だったのではないだろうか。そして、幸太郎は忠子に「東横線沿線あたりに家を建てないか」と話した。彼女も直ぐに賛同した。その背景には自分も青山学院緑岡幼稚園の主任として職を得て活動を始め、幼稚園の評判は大変よく、ある意味で順調な日々を送っていたのである。当時、開拓が進む東横線沿線にいよいよ自分の家を建てることになった。とにかく「郊外に自分の家を持つ」事は幸太郎にとって大きな夢だったのである。こうして1937年3月、目黒区柿の木坂、東横線の当時は府立高等駅から4～5分の所に我が家が完成、幸太郎、忠子にとってはその地が終の棲家となったのであった。

13. 世界第二次大戦へ 戦争と敗北

徳川時代より鎖国主義を通して来た日本は明治新政府を擁立、急速に近代化をはかった。その後、日清、日露の戦争で勝利、これに増長した軍部は満州国に傀儡政権を作るなど、以降、日本は帝国主義を標榜、最終的には日独伊三国同盟を結び、遂に1940年12月8日、日本はアメリカに宣戦布告、世界第二次大戦へ突入して行った。米国のNCRは当然、日本での活動を停止し、幸太郎は止む無く、国策に沿った日本光音という会社で事務職をただ黙々と務めることになる。4人の男の子のうち、



千尋 忠幸 義也 明

上の二人、忠幸、義也に召集令状が届き、隣組組織から「万歳」を三唱されて出征したのだった。自分の息子を兵役に送ることを名誉と心得、記録したかったのだろうか。一方、母親は自分の子供が兵役についても人を殺める事のないように、声を出して祈った。父は当初は聖戦と感じ、長男、忠幸には4人の子供たちを国旗の前に並べ、海犬養宿禰岡麻呂の歌を添えて壮行したのである。「御民我生けるしるしあり天地の栄ゆる時にあへらく思へば」 田村家として「息子を戦場に送る」という試練にあって、幸太郎はある意味で気合を入れたかった、とも受け止められる(写真)。現実に忠幸を戦場に送り、行き先がスマトラと知った、戦場からは遠く、後になって知ったことだが、そこは殆ど生臭い戦場はなかったとわかり、とりわけ母はほっとした。あえて言えば忠幸は最も平和な戦場ですごしたのであった。幸太郎は自分が日露戦争では年令が若く、兵役にはつかずに済んだ。だが、初めての自分の息子を兵役につかせることには複雑な思いであったのだろう、しかし、義也が軍人になり、特殊潜航艇要員として死を覚悟したことを知って幸太郎の思いは激しく揺れた。己の死をもって敵兵を打つという陸軍の特攻隊任務であったのである。さすがに万感の思いの中、義也を送る時には父、幸太郎は全く無言、忠幸の時には勇んで送り出したが義也を送り出すためのお祈りの会は出来なかったのだった。彼の命をそのまま殺戮の道具として、、、という発想はさすがに父は許せなかったのであろう。恐らく幸太郎自身がどのように振舞うべきか、自分が分からなくなってしまったのではないだろうか。やがて米国は1945.8.6.に広島、8.9に長崎に原子爆弾を落とす。日本はその爆弾の破壊力に驚愕、新聞記事は「敵は特殊爆弾を使用せるものの如し」と書き、ポツダム宣言を受諾、ここに大日本帝国は敗戦を認めることとなったのであった。1945.8.15、この日、母はどれほど嬉しかった事か、兵役に就いていた二人の息子達は人を殺める事もなく、無事に帰って来る事に歓喜した。父母には微妙に価値観が流れていたが、キリスト教のおしえにある「人を殺すなかれ」は一致した意見だったそれは万感の想いであっただろう。

敗戦直後の苦難の道は厳しく、とりわけ両親は全く収入の道が経たれてしまった。親

戚の子たちを我が家に受け入れ、東京での生活を可能にし、その下宿代を得た。だが、それでは足りるものではない、生活は困窮をきわめた。当時、GHQ は CCD (民間検閲局) を開局、幸太郎 (後に義也も) は僅かな収入でもとそこで翻訳業に携わった。当時の社会情勢はソビエト連邦の共産党からの政治的な活動を抑える意味合いもあったろうが、後に売国奴という汚名も聞こえた。しかし、この瀕死の様な状況の中、空腹に耐えてそれぞれの体を保持するので皆精いっぱいだったのはたしかである。上の3人の息子たちは何かとアルバイトで収入を確保していたが、千尋は15歳、成長期に入ったが、細い足と手は針金の如き性状と母は嘆き、先々を憂えた。国内的には政治的に不穏な活動が起こり、戦後の数年間は人々の心はすさんでいた。朝鮮戦争が勃発し、それが皮肉にも日本の回復と復興の引き金となったという。

1.4. 戦後すぐ、1945年、Saturday Evening Post の記者が田村家を訪問した記録

1945年、戦争が終わったその年の9月、アメリカの Saturday Evening Post 社の William L. Worden 記者が2人の友人をつれて我が家を訪れた。「戦後、直ぐの日本の家族の暮らしぶりとともに彼らが抱える不安と危うげな希望について報告する」と題し、雑誌に載せたいという。

この雑誌記者が田村家を訪問した話の流れは、次の様な背景があって実現したものである。母、忠子の姉、信子はアメリカの Juilliard 音楽院でピアノを学んだ際、仲よくなった Miss Florence Wells という人がいた。彼女はアメリカに親族がなく、独り身で信子と一緒に住むようになり、そのまま日本にやって来たのだった。戦前から親戚づきあいのようにして過ごして来たのだった。こうして戦争中もアメリカに帰らず、とうとう、日本の収容施設に抑留されていたのである。アメリカ軍は戦争終了後、直ちにこの施設を開放したが、その際、Worden 記者も同行し、そこにいた Miss Wells から田村家を紹介されたという次第だった。この雑誌は週報で敗戦直後の日本の家庭の訪問記を計画した。田村家は日本国民を代表するような家族ではないがアメリカという民主主義国家ならではのレポートに意味があると考え、この話を受け入れたと理解している。その年の1945年11月24日号として出版された。ある意味でリベラル派的な田村家であったが、そうであるが故にあのように敗戦という過酷な社会、凡そ殆ど全ての物流が閉ざされた時に、どのように人をもてなしたか、あの過酷な食料事情を受けた彼らはどの様に捉えたか、このレポートはその内容を赤裸々に綴っている。また全く英語から遮断された来た幸太郎が5年間の空白の直後、突然、殆ど1人で3人の記者達に話をしなければならなかったことも、記録しておきたかった。それは空前絶後の仕事だっただろう。しかし、記録としてここに記載するのは、幸太郎の一大記録として残しておきたい、と思うのである。

「冒頭は田村家の家族構成から始まる。夫婦と4人の息子、1人の姪の紹介があり、夫婦共に英語に馴染みがあり、話せること、全員がキリスト教徒であるという点でこの家族は典型的な日本の家庭とは言い難いかもしれない。戦前、田村はアメリカの事務機会社 (NCR) の日本支社で働き、アメリカはオハイオ、デイトンに世界からのリーダー達が集まり研修会に参加したという。最後はセールスマン育成の仕事に携わり、好成績を上げていた。それにまつわる記念品が飾られていた。彼の生涯の趣味は、読書である。哲学、小説、随筆、詩集、宇宙など、言わば教養のある書籍が家中、ところ狭し、と置かれていて、大学の教授か研究者の様な住まいである。ともかく、随所に本が置いてあったのが第一印象である。家の一室にはピアノがあり、末の千尋は開戦迄レッスンを受けていたという。犬、猫を飼っていたが、今は猫だけだそう。焼夷弾で家具を失はずにすみ、凡ての家財が守られ、焼夷弾、爆弾による被害はなかった。これは幸運だったとしか言いようがない。東京も横浜も、その都市の中心部は完全に消失したが、二つの都市の中間地域は、郊外という位置に区分され、かなりの地域で消失をまぬかれた所があったのである。しかし、戦争で夫婦の職は完全に奪われ、田村は戦争中携わっていた仕事は専門外で給料も半分以下になってしまっていたという。そして、今やその職業すら失い、全くの無収入、前途の目途が立たなかった。これから先、どのような生活が待っているのか、希望の無い時間を喘

ぎながら見ている状況だと語った。

社会そのものが急停止したことで、人々は混乱し、困惑の日々を過ごしているが、とりわけ食料の確保がこの家族にとって最大の問題になっているという。配給される細々とした食糧では到底、青年期の男達の腹を満たすことは出来ない。さらに悪いことに現状、正規の収入がないため、野菜や生魚を購入したくても現金がないという。大して広くない庭に野菜を育てようと努力するが、もともと農家でもない田村家の人々の手では育つものも育たないという訳である。我々3人の記者団はこのなけなしの家族の食材から食事の提供をうけたことになるのである。

その内容はキノコとジャガイモを具にしたカツオだしのお澄まし、ペースト状に潰した干し豆、苦勞して手に入れた鮭の缶詰の一切れ、闇市で購入したというトマト、そして煮込んだカボチャを盛った鉢、みかんの缶詰、なけなしの食材からのものばかり、しかし、どう考えてもこれはご馳走である。日本の感覚で言えば、宴会料理といってもいいだろう。しかも、この食事は我々、3人の客と田村氏だけに供されたものであった。

田村は、日本にも民主主義がもたらされることを願っているが、彼による民主主義の定義はいっふう変わっている。彼は「政府は私たちに何をなすべきかを指示すべきだ」と言う。「しかし、私たちは政府の決定に対して『反対する権利もある』という事を示さなければならない時もあるのだ」。彼は、民主主義の世になれば人々が代表者を選挙で選ぶようになる事は知ってはいるようだが、それが最も重要なことだという認識はあまり持っていないようであった。ある意味でそれは無理もない事であっただろう。日本は戦前から帝国主義であったから、、それにしても、あの忌むべき戦争で近親者を失わなかったことは、田村家にとっては誠に幸運だったと言う他ない。地図を見れば東京も横浜も厳しく爆撃を受け、その両都市の間のきわどい地域は焼夷弾や爆弾をうけなかったのである。まさしく幸運だった。家は全部で七室、大きな玄関を持つ2階建ての家には電気、ガス、水道が完備していた。壁に次のような文言が書かれた石版印刷が掲げられていたのが印象的だった。これは田村が老いたキリスト教哲学教師（内村鑑三）からもらい受けたものである。

I for Japan
Japan for the world
The world for Christ
And all for God

田村家の人々は飢えてはいない（正確には、まだ飢えてはいない）。この冬、彼らは寒さに苦しむだろう。しかし、日本やヨーロッパで仮小屋の中に押し込められている人々のことを考えれば、田村家の人々は、立派な屋根の下で暮らしているのは間違いない。また彼らは、大戦初期に日本軍に蹂躪された地域の人々のようにひどい目にあったわけでもない。田村家の男たちは、戦争の大惨禍の後で大きな意味を持つ、健康と教育に恵まれていたのである。彼らは納得いかないかもしれないが、彼らが支えてきた、そして、今も支えつづける日本帝国が犯した罪を考えれば、彼らに対して憐れみを感じるのは容易ではないことなのである。彼らは日本人である。あの大がかりな太平洋侵略計画がもし、成功していれば、その儲けにあずかったであろう人々でもあるのだ。彼らは、中国を破壊し、フィリピン人をはじめ弱い人々を無慈悲にも踏みにじり、アメリカ人捕虜を虐待した国家の一員である事も間違いない事実なのである。それは決して忘れてはならない事だ。とはいえ、田村のママさんの振る舞いに好意を持たずにはいられなかったのも事実である。改めて今回のレポートは何と言っても「敗戦直後の日本の家庭の状況をどう捉えることが出来たか」につきるが、戦勝国側から見た戦争直後の敗戦国の内情レポートをしようとしても、恐らく殆どの家庭は受け入れなかったであろう。

察するにこの以上の文章は戦勝者として日本の土にたち、初めて知った日本人が数少ない親米派の家族であったことに戸惑いをもち、永い戦線を共有し苦悩を共にした兵士達への思いと、日本にもいたアメリカの一般市民に似通った価値観の人々に遭遇して、戸惑った様子が描かれていた。戦場を走り、様々な苦悩をともにした兵士たちへの思いも、今この平和になった地を訪れてある意味で別な形に昇華していくのだろうか。William L. Worden 記者は占領軍の一記者精一杯のレポートを記した。翌々年、このレポート後の事が気になっていたのだろう、1947年に再度、彼らは我が家を訪れ記録を雑誌に載せた。

2年の歳月に多少の希望の糸口を見出し、田村家の家族がそれぞれの道を歩んでいることを報告してくれたのである。残念ながら当該の雑誌は廃刊になり、1965年1月千尋がイリノイ大学にポストドックで在籍した際、手を尽くして探したが残念ながら雑誌のback numberをこの大学では見つけることは出来なかった。

15. セールスマン教育を最後の花道として

戦争が終わり、軍部の政治は消滅した。だが人々はそれぞれが自分自身の一日々を保持するのに懸命だった。忽然と現れた闇市は瞬く間に広がり、銀座、新宿、上野、は特に多く、妙に明るいカーバイトランプ(アセチレンガス)は人の顔を下から照らし、皆、生気のないまなざしで屋台の品物に目を向けていた。戦争が終わり、社会の秩序は辛くも日本の警察が保ち、時々起こる不審な動きを抑え、時に不審な活動も起きたが大勢は闇市というデーモンの発生で、それまで語られて来た「きまり」や「規則」は崩れていった。篠原内閣は押し寄せるインフレーションの波に対応、1946年2月財政金融引き締め政策を発令、世の中では「新円」しか使えなくなるなど、戦後の社会不安は様ざまな形で人々におそいかかり、見え隠れした。とりわけ国鉄の解体に関わる労働組合との闘いは所謂、国鉄3大事件、下山、三鷹、松川事件が発生、だがその後の捜査も続いたが迷宮入りになった。



一方、GHQが民主化を進めるためには、憲法の改正が必要であると、初めは日本政府からの改正案をGHQは納得せず、独自に草案をまとめた。日本政府はこの草案を受け入れて、新たな改正案を作成した。この改正案を帝国議会で審議し、1946年(昭和21年)11月3日に新しい日本国憲法が公布され、翌1947年(昭和22年)5月3日から施行されたのである。新しい憲法は、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の3つを基本原理とし、天皇は国民の象徴となった。国権の最高機関は国会となり、内閣が国会に責任を負う議院内閣制が取り入れられた。新憲法の制定にともなって、地方自治法や教育基本法、民法が改正され、新しく日本社会党や日本自由党が結成され、議院内閣制を定めた新憲法のもとで、政治が行なわれることになったのである。右翼側の思想にはアメリカから押し付けられた憲法という評価もあったが多くの日本人はこれを平和憲法と評価し非戦になることを喜んだ。GHQは戦争に関わった人々の軍事裁判を行い追放、と絞首刑が実行された。その後、米ソ関係は悪化が鮮明になる。

幸太郎は第2次世界大戦終了後、4年目になってNCRからのCome Back Callの誘いを受けて、勇躍、自分の学んだ道に復帰、教育部長、兼 販売部長として働くことになる。数年後、定年退職すると、セールスプロモーションビューローの専務理事として各地方に行き、セールスの真髄を語り歩いた。千尋は父に帯同し講演を聴く機会を得た。この時、父は日本にも大型スーパーを予見する話をした。まだ、道路を占拠して屋台売りも盛んに行われていた頃だったのである。どのような商品を描いていたのか分からない

幸太郎は第2次世界大戦終了後、4年目になってNCRからのCome Back Callの誘いを受けて、勇躍、自分の学んだ道に復帰、教育部長、兼 販売部長として働くことになる。

数年後、定年退職すると、セールスプロモーションビューローの専務理事として各地方に行き、セールスの真髄を語り歩いた。千尋は父に帯同し講演を聴く機会を得た。この時、父は日本にも大型スーパーを予見する話をした。まだ、道路を占拠して屋台売りも盛んに行われていた頃だったのである。どのような商品を描いていたのか分からない



明-眞生子 千尋-能子 義也 敏子-忠幸
(父の生存中の最後の正月、義也は後、久美子と結婚)

が、掃除、洗濯、調理、そしてテレビの展開が次々と日本の市場にも現れ、戦争のイメージは次第に払拭されつつある時だった。丁度その頃、アメリカではアーサーミラーが「セールスマンの死」という題の演劇（1950年）をヒットさせ、熾烈なアメリカの競争社会の現状を訴え時代を象徴していた。セールスマンという職業が持つ二つの側面、即ち「昂揚と失楽」の2面性を持つ職業であることをしっかり認識し、店頭で販売するときの心構え、そして「自分が売るべき商品の特徴を正しく分析した上で信念をもって語り掛けるように話せ」と語った。日本は高度成長期に入る前であったが、既にその社会へ向かって移り行くスタート台に立っていたのである。父の心の深層に何が去来していたであろうか、理想を語る講演会を聞き、何か深い感慨に浸ったことを覚えている。父、幸太郎は最後の力を振り絞りセールスに関わる著術を進めていた。ひたすら著述に励み、立派な机を購入して執筆に励げみ、最後の著述は「販売処方箋」ダイヤモンド社、1951年である。これまでのすべて彼の集大成として自分が経験し、歩んできたことを表題の形で纏めた。途中、義也からのアドバイス、明からの意見も取り入れ、亡くなる直前に仕上げ、発行に間に合った。父が次第に胃ガンの腹痛に耐える姿に接し、周辺は息をのんだ。この当時の医学はガンには勝てなかったということである。1960年の後半から発展したデジタルコンピュータ技術の進展は目覚ましい。人間と電算機器をつなぐ道具になるであろうが電算機自身が一つの個性を持った存在になろうとしており、言語を取得したコンピュータの未来は想像を超える。現に、囲碁、将棋、チェスなどの限定世界でのゲームはことごとくコンピュータに屈した。人間の曖昧性や個性の問題にも挑戦は続いているが、今後、多元的な世界にも近づき、経営に立ち入り、さらに管理機能を含め巨大化して経営の中核にあって数値管理を全面的に掌握するようになった。さらに言語領域にも介入し、これから先は、さらに人の領域に介入する、すでに可能性もあるだろう。

あとがき（千尋）

田村明没後12年が過ぎた。彼は亡くなる一年前に「天なる我が家」の表題で父、幸太郎についてかねてから母より聞いていた話を纏めようとして書き出していた。後半になると内容が次第に散逸的になり、先を急ぐためか、何となく途切れ途切れになってしまっていた。とりわけ、NCRに復帰幸太郎が青年期、教会にいく所も単に物珍しさに訪れているような表現だが、私が母から聞いた話では幸太郎はかなり切羽詰まったところで教会を訪れ、加藤文さんという人に出会い、青年期の幸太郎の悩みを聞いてくれ、それはとても強い心の支えとなったという。

幸太郎は村上教会で知り合った人が思いもよらない偶然に導かれて生涯の相手に出会う事になって行く、後に父、幸太郎が忠子と結婚するまでの経緯は子供達から見れば、歳を重ねるごとに「御手の導きにより誕生した家族」という感覚がつのる事となった。明は1960年、関西の日本生命に就職、大阪の集会でお世話になった黒崎幸吉先生の司式を戴いて斎藤眞生子と結婚、千尋は、矢内原忠雄先生の司式を戴き、1961年永木能子と結婚した。1965年の暮れから2年間、イリノイ大学に留学、帰国すると日本はその間に飛躍的な展開が進んだ。すっかり様変わりして、日本は瞬く間にアメリカ的な店のたたずまい、父の三協精機で講演したこれからの日本の予見が的中したような思いをした。だが、戦後、80年になろうとしている、多くの若者は過酷なあの戦争を知らない。そして今はウクライナやパレスチナの争いに心が痛む、早く何とか止めてほしいと願うだけだ。